バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第151号〔2017年9月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第151号をお送りします。今月はルカの福音書の学びを進め、7章18-35節までを学びました。

400 年間、ぱったり途絶えた予言者の出現を待っていたユダヤの民は、ようやく現れたカリスマティックな洗礼者ヨハネこそメシアではないかと考えた。しかし彼は民衆に、「メシヤは私ではなく、来るべき方は聖霊と火で洗礼を授け、麦と穀を分け、穀を消えることのない火で焼き払われる方」と教えた。（ルカ 3:17）その後、ヨハネは領主ヘロデの不当な結婚を公然と批判したため投獄され、弟子たちが報告してくるイエスの言葉や彼の行動を牢の中で聞いていた。そして不思議に思った。「主イエスは火で洗礼を授けていないし、穀を焼き払われるどころか、罪人と共に食事をし、彼らを赦している」そこで弟子たちをふたり送って主イエスに尋ねさせた。

「来るべき方はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」

この問に対する主イエスの返答は間接的で、メシヤの業として貧しい者たちへの福音の宣教と、病や障害からの癒しを挙げ（7章22節）、最後に、「わたしにつまずかない人は幸いである」と付け加えた。この7章22節の言葉はイザヤ書35章4-6節、61章1節を反映し、主イエスご自身もご自分の使命について、ルカ4章18-19節で「この聖書のみ言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言された。つまり、洗礼者ヨハネの問に対し、主イエスは「そうだ、メシヤは私だ」と仰っていることになる。

イザヤ 61:1「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つながれている人には会報を告知させるために」
イザヤ 35:5「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。」
ルカ 7:22「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、脚の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っているていとは清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」

洗礼者ヨハネのように主イエスをメシヤかどうか疑った人は、当時けっこう多かったと思われる。というのは、彼らが想像していたメシヤはかつてのダビデ王のように政治力と軍事力に長け、ローマからユダヤを鮮やかに救出して、敵を焼き払ってくれるスーパースターだったから。しかし彼らは、主イエスがダビデの血筋に生まれる救い主であるけれども、ダビデ王の再来ではないという重要なポイントに気づかなかった。彼らはここにつまずいてしまった。

これは私たちにもよくあることで、例えば恋人との関係を結婚に結びつけてくれなかったら神を信じるのをやめるとか、病気を治してくれなかったから神はいないと結論づけるとかと似ている。人は聖書の言葉よりも自分の思いを上にしてしまうのでつまずく。神様につまずくのではなく、自分自身の思いにつまずく。主イエスがおっしゃった「わたしにつまずかない人は幸いである」とは、聖書の言葉を思い起こすようにという答えにほかならない。

イエスは、洗礼者ヨハネが伝えたような裁き主ではなかった。裁くどころか、世の中を悪に満ちたものにしてしまっている私たちの罪の裁きを、私たちに代わって受けてくださった。ご自分の命で贖ってくださった。世の中は苦しいこと、悲しいことだらけだが、この世に希望を置いている限り、人間たちが形成する社会であるため本当には希望をかなえられない。そんな私たちのために主イエスは神の国という永遠の希望を開いてくださった。私たちの希望はこの世を超えた、この国にある。そして主イエスを心に受け入れれば神の国に入ることが許される私たちのことを、「幸いである」と主は言われる。